



里見八犬傳

第六輯

五下

13
709
31



門遠 13
 號 709
 卷 31



明治三六年
 十月九日
 發行

南總里見八犬傳第六輯卷之五下冊

東都 曲亭主人編次

第六十回 胎内竇に現八妖怪と射る
 申山の穴窟に冤鬼髑髏を託ぬ

登時犬飼現八と鴟平が長物とて嗟嘆不堪む現世の人のさめく
 縁得たる孝子もあはれかき不慈の親もあはれけりあはれもその子の賢る直死
 心不兵竹の世を形多くし捨てて菩提の道入んとあはれいと惜むる人あはれ
 退らんと聲近し笠引とて喃翁庚申山の奇異怪談赤山石大村親子のうへ
 さいと詳小告りて日数累し旅宿の憂苦を忘るるは老い慰めりなまよの地か
 きらる甲斐ふりる天山の壤と踏が後々まで話柄小るる死の言ふれど此度
 多く人を未承し心急だのせらるれば又久さのり小せんゆえに彼山の麓路を過

八犬傳第六輯卷之五下冊

曲亭主人編次

おのりふくろと志まきまき至るべし。かれが意見に随うて弓を引て買ひてゆく。この
の和主が好むとせむと取出くなく賣まむとのりてやと身起も鴉平の微笑
まらぬまび外面瞻望て彼商せ日影の敵て彼処の横に外れら。晡時程もまら
らん。今より言はれあふとも神子内村に日暮暮ま。あまをそ彼村小客店にまれど
今宵の柱より宿小曉のめと勧めても。いそはあうい思ども。ゆでら宿残の欲は
随ふゆゆる死を物々げ。權一懲りて旅の人の足さく林にめりきとせられぬせ
痛まぬ肚と麻りる小似く朽惜念下弓前にお身の意は稱しをみづらう擇とぬ
うと志く馳て左右の身を搦撲らうとあまを現八にこれ彼と擇と取る
やうといざとく速と其鴉平のそ依柱は推當く強引けく兩條の獵箭
共侶さあはる。その間小現八の腰小著る残鮮出しく弓箭の價を取らせら。
やまま生んとる程は鴉平の月町噺は客入路次は由ぬる。彼神子内とら

過はて山巔村まで急ぎせぬ。是首より七山巔まで大約二里半道なれども。
山のあれが四里も敵へる。倘この風が北よ吹らば雨もあつらんも測りあらる。あらる
ぬと諄々も田舎氣質の實意あ人の辭は現八に歡びと演別と告てま
なま結ぶ笠の勿撥取る獵箭と背のそ帯をそ俵挿めども後へら引ぬ手
東ら小脇小杖と携へて寝るも麓路と足小信。急死けり却説大飼現八
今ら路と勝負と頻り進みて身の危をあらざる。あま後にも茶店のある
トが賣弄間話の只世渡りの方便のそ土俗の言は特む足しを行銷する
処あり今宵の宿に投入ま。その難をそあらると侮り。よき道守者と傭を只
かの口箭と携へて登る山路の二里あり。神子内村に稍うち過く山巔のゆりく
急げども頃ハ九月初旬日影短くたぬ黄昏く天は曇は山ゆるところの
ゆりくも圍は樹下は陰小前路もつるまら。いふあら有敷系は安らう。腹肚裏は

八代傳六輯卷五下

二

一編良書

必やうかふべしといひ知れむして鳥夜ふ要る死弓箭より買ふべしぬの松明より
 一と噫悔しも脱落おけり任他神子内より山巔村の路程一里半道あり
 とうり既中七神子内より二十餘町もまゐらんふあより進むも退くる路ふ
 損益ある處へ警者も京へ登るとの世の常言もあつたものを暗死は怕る工を
 と志を焚く其れともかゝる崎嶇と山も果し多死夜の深夜程中辛
 しく雖邁々々人の遇ひ西秋東秋原よりきて迷ひ入ると幾町をけん
 澤邊傍ひは登ると二里あるとどども麓村に至るとく牡鹿の言の
 びえけりわれ里の遠くは死と思ひひく且疑ひ且怖れ心あてさ
 まの夫が後悔膝を唾まぐ又はくどとさう不知案内の深山路と如法
 闇夜ふ辿らんよりあゆむ時を俟て死秋否々あま留宿とも猛獸毒蛇の
 患ひと御宗よのあつたもあつたも只命運と天の儘しく夜曉し七は何処

まれ里のも到らん人あも逢んさらとさる海も上り下り又幾十町秋の程にひ
 りるく最大なる石門の洞より小まきけり。あつた天の稍霽々没送りしは七日の
 月山狭ふる海幽る影を便著小暗と定め且彼此をええ。嚮口足緒の
 賜平が説せしをそれとせ。庚申山よりといひ胎内甕は似たりけり。六什麼生
 とをり小且敬馬死且呆れて忙然とて立在しを。あつたくく又ありさうもあつても
 山深く迷ひ入りしと又今あつた山巔村まゝ至ると輒死路まわされが今宵を
 且この窟居龍を曉しく里へ下りてと尋思とて坐と占く弓箭を側より引つけ
 る海深る夜を成くとれが月の忽地没果くゆび鳥夜よまふなり現幽谷の嶮
 岨るこの四邊の鹿もあつた山山氣頻る小肌膚を犯しく夜寒の里は弥増る
 熟ぬ山路小夜をよめく迷ひぬるにこそこれ身又心も疲勞果くよ。あつた
 路を會つたの。艱苦のゆづらまを途言を察せむ田舎翁との。あつた

まこと。実意ある人の諫を聴きしより千金の身を危くするの思心魚目混珠と亦けり。後悔の外他言もなき。寝られぬ随ふ友の身養父母の親のゆに在るとまき世の過去を思ひ續けく曉る天をいとく。遅くと候ほど木をあるも鐘の音はれ後とも。星の光を仰ぐ瞻望。又三思と比東のより忽然と螢火可の火光閃々として。西二点あるを投ぐ事如くいと幽まると現八ふ怪しく彼の鬼火映る。らざり天狗火のやあらんや。それと速く半弓合す胎内竇を吐く。傍の樹は陰を眉柴はあつ顔ひを。ある程は件の火の近づく随ふ大なる。七かたを燭まると炬は異なり。既ゆてその面四五及びりあるまで。現八を。るほどんとき瞬もせむり。怪むべし。火の光の地狗天狗の所為ある。えもえられぬ妖怪の両眼の耀る。且その模様と壁の面は暴る虎の如く。口と左右の耳を刻長く鮮血を盛る盆より赤く又を牙の真白く。

劍を倒れ裁る如く幾千根の長髪鬚の雪は閑宮柳の糸の風は交糸れて戦。ぐま似たり。あれども形體の宛人は異なる。腰の両口の大刀を横佩て驛駒。跨るがその馬も亦異形なり。全身まぐ枯木の如く処々は苔生て四足の樹。枝るべくその尾の世の生る。左右不従ふ若黨あり。一箇のその面藍より音く。一箇のその色楮石小似く頭髮さへいと赤く。諸天の彷彿する。この妖怪主従徐々馬を歩せり。何のやうん相譚々々或の高く笑ひさす。胎内竇のくまよけり。現八を彼為体と。名を見定めく。此も騒ぐ。気色も心の中心は。彼馬は騎する。妖王も先はまれの物を征。後ろと征せし。彼奴を射く。落さる。餘の必逃亡る。や怨心を復すとくこれ彼齊一うち逆ふともを怖る。足るのけら。と早速の尋思の勇士の大膽。兩條の箭の腰より半弓左右は突立。竊は件の樹は林本。

登る。その神速死に猿猴の如く程よ死枝は足踏留めて弓は箭刺すく
 亦固めつ。雲委時矢比を張ひたり。ゆきけれども妖怪木のくろく思ひはざりん
 心のどけくうち相譚て胎内實は近き進み入ると程は寛濟せし現公
 矢声も猛く茂つ箭前は件の騎馬も妖怪へ尤の眼を比深し射られく。下声
 苦と叫びものぞ馬より檣と墮下ふ吐嗟と騒ぐ両箇の妖物も肩の身を
 取り肩より引ひ一箇へ馬と牽々も舊来一々又逃亡けり。あま至りく野干
 王の又黒死夜とるものくら現八つ思ひて。下箭前は二箇の妖怪を射まは
 たりけし。先樹の下より立てのさそ思念を叩きまは彼妖物水の不意成
 撃れて怕れ惑さく逃されども。半弓の圓竹めく箭前も亦真物も勢
 ひ鋭く力弱りゆれば眼もゆきと掠と取る難るべしと思ひ矢坪の違
 ねど。雨も老う妖怪のめ。一箭めて腕も死んや或の眷属同類を駈催

あつくぬさびまびその回の防は難くあ。地方を易く彼奴を。月をせんと
 そよけれと思ひよければ。不特む弓は下箭を推乃て胎内實と西のく入も
 扱て又アツれば。雲山異境の奇特るあ。波る月の出るあ。今ほ黒
 白と別ざり。星光の恒もさく。朧夜よりも明りければ。進退大く便りをゆ
 只。官小椽本登りて。彼鵲平たのる。違つど。基石あり又。長丹龍の難所あり。
 二間餘の石橋裏見の瀑布。庚申の文字石第二の石門燈籠。龍石洪鐘。石を
 遙ふらち見え。十二三間ある石橋を自若とく。渡りけり。信るる。現八つ。巻
 法捕物は妙をゆき。且樹小登り峻岨を。歩る。坦地を。く。ゆ。か。ひ。
 初詩我小在り。と。た。芳。流。閣。の。屋。上。あ。く。大。塚。信。乃。と。組。敷。き。る。働。き。こ
 の。と。知。れ。り。然。れ。ば。ア。を。れ。今。宵。も。亦。深。山。の。樹。上。に。登。居。く。妖。怪。を。射。く
 巻。文。系。れ。ど。恰。と。の。ひ。恰。と。の。ひ。十二三間ある細谷橋を足下暗死夜深渡り

亦怕れず氣色を死に人の及びぬ所ゆれども猶夜視ゆて遠見京の定りぬを
 憾とまると既おしく石橋を渡り果く又攀登れ前路の岩窟數ヶ所あり
 上古穴居の迹ありわんといひつゝ現あるべしはかかこの知る奥院ま
 遠くもわらとどひつゝ又も程に就中巨大なる岩窟の中に入りて火を燈さ
 うけるあま至りて現ハと心ともく西三歩遠巡とまると驚然且怪
 原來あま妖怪あり漫々地方と更んとく深入る悔いゆと足が騒ぐ胸を鎮
 めく總に残る一條の箭を抜出し弓を固めくあま立ど身捕り登時件の
 岩窟よりと細まる声をまき勇士うれき怪をひて吾侪の系より妖怪
 ぞ和殿へ今宵ありて胎内實のほとり也。こが鯨言とるん射のいるその歎びと
 いらんとく候と既久一の死猶相譚て頼死のりもあまを立よりく且火
 わりぬらむと叫ばられ現ハと此も擬議せむと又りまら肚裏お思やう。

彼奴が甘言をいひ誰引寄せんと欲するともいひわりのとやいふ且試く時宜
 依も樹をわらぬと尋思とく勇氣を示し声高きふ浮世は遠く深山
 幽谷への住む所ありぬ和主の妖怪をいふ教ふ亦これ何者ぞと詰
 問つ立對へ彼人答てられぬと某年来ある住らるる見も知らぬいれども一
 朝の説書にござり枉て且く立ちぬとよ現ハあらる疑ひの釋をも推
 辞は怯しりとや思んえうてあつと領死く弓箭投捨岩窟に進入し
 件の男の肩よりよふと遠くいさうら揮て推禁め勇士をさす半の和
 殿の懐に瑞玉あり某悼るよりわれ只願は相觸ることを欲せ目今もい
 如く和殿に鯨言傷けとく憤と洩るへ實を得る死實されども款待進
 する物もさうら解く火のわらぬ夜寒を凌ぐ足足死のとのひらき蒼柴折
 焼く傍よりける推實とまめく饑小元るを現ハと火光に就て件の男とく



犬飼現八

八代傳六車卷五

十一
二
三



妖怪と
射て現八
鬼子
逢人

八代傳六車卷五

十一
二
三

足る小齡の二十ありより、形體骨立顔色蒼然、縹緲する仁田山、袖は電甲
 形の服、章染るる、幾月日と歷せり、けん海松の如くは、搔垂れ、小袖ひらりと被
 りける。その為体何と云く、この世の入りかありれど、護身囊多玉、怕るこひ
 一と之の陰鬼多む、狐狢貉、狢同試む、知るより、あつと、と、之、膝と推進めて
 和主の奮ふ、射る妖怪と、雙言とのり、渠の何水の妖物、ゆくと和主の亦甚摩る
 りれど、と、うち、虫と示さむや、と、せうく、向れて、件の男の嘆息、額を拍て、話をも
 苦し、死過去く、と、倭敷れば、十七年いと長く、た言る、と、心静ま、は、嚙、嚙、嚙、和殿が
 射て、落、は、妖怪のこの高峰る、胎内竇の邊に、棲り、野猫の化、は、渠、既、は
 幾百歳の目生、霜と、麻、昔、隨、小、大、は、多、と、憤、は、多、と、猛、き、と、虎、は、似、り、神通自由
 どの、どの、の、此、の、山、神、土、地、を、奴、僕、の、如、く、役、使、り、む、と、い、こ、ま、し、ゆ、と、も、木、精、年、老
 獸、猫、貂、を、この、類、を、相、從、を、渠、は、媚、今、宵、彼、奴、が、乗、る、馬、は、是、千、載、の

木精、は、老樹の精の化、は、又、彼、両、箇、の、役、者、と、ん、え、り、所、に、山、神、と、土、地、を、よ、り
 野猫が、射、れ、る、馬、より、隊、を、る、と、り、仇、と、索、る、意、を、く、慌、忙、に、野猫、を、肩、に
 かけ、逃、亡、し、り、あり、は、件、の、兩、神、の、神、通、渠、は、敵、に、く、く、年、來、使、役、せ、ら、れ
 ども、真、實、歸、伏、せ、り、の、れ、る、縁、を、を、肩、に、く、く、幸、ま、と、次、負、け、く、宿、所、に、還、れ、る
 の、り、の、猫、と、貂、を、と、り、必、和、殿、を、索、求、め、く、死、心、を、復、さ、ん、と、テ、を、謀、ら、め、然、る、を
 と、り、あ、る、と、り、亦、是、和、殿、の、洪、福、也、又、某、を、陽、人、を、と、止、り、も、面、を、せ、れ、は、こ、こ
 る、この、深山、より、程、遠、く、ぬ、赤、岩、村、の、郷、士、を、り、ける、赤、岩、一、角、武、遠、と、呼、ぶ、こ
 の、横、死、し、る、克、魂、を、は、苗、を、く、假、は、次、女、を、顯、し、り、某、累、世、武、弁、の、家、ゆ、く
 郷、士、あり、り、これ、も、武、藝、云、い、人、は、讓、ら、せ、り、と、り、鞍、馬、八、流、奧、義、を、極、め、好、む、と、り
 人の、師、と、り、り、より、鄙、め、われ、が、弟子、ヨ、メ、り、り、ゆ、く、寛、正、五、年、の、初、冬、某、漫、
 武、藝、を、自、負、し、く、名、を、顯、さ、ん、と、あり、ゆ、ゆ、昔、より、く、人の、怕、る、この、深山、を、

奥院とんとく門人ホと誘引し衆皆齊一陥とく諫とて説破り高第
 僅に三四名と後僕とを相俱くとも山とく降る程は既小第二石橋と渡
 らんとせ折る人ホ顔色の蒼々たる程は戦慄と半至る引く人ハゆび
 諫めく己ざりしと某些も聴むて弓杖突く只一已彼石橋を渡果てて山岩
 窟のほよりまぐ頻り小登る程ハわれ陰雲舞る風旋と音して倏忽塵埃を吹
 起れぬぬ倒されと山岩小推す心の迷ふも前後よりとむるのさるるも
 沙石小眼と撲れく怵くもわれば弓投捨つ袖免合と頭を低く眼と撞
 由駒と關ふ件の野猫との岩窟より跳出けん某が後方より背は尻とらりて
 仰さる引倒まをあらぬとと輾る隨は身を短刀と抜放る乗一鬼とら
 猛獸の吐と刺んとつれとも拳狂る前足を一刀研り浅痰ゆく爰所
 ろる物ともせむ勢力罷る某が吐み啖著るける牙ハ鋒より鋭な一牙

振られ大事の深痰ふ要時もわれ緋影れ死骸と窟は引入れ飽
 まく腹を肥されりつくと知らぬ門人ホ某と待らむと暝昏小宿所は還
 是云云と報りて妻子の勢は人のさるるをわれは次の日里人さす駈催し
 たる門人送るつれまき又この山と索まればその回も長石橋と渡るのさるる
 又徒は引く折る件の野猫は某が顔は変りて某が衣某が大刀
 行膝さ身小著く胎内竇の邊ふり既ふりてゆくと衆人と呼びさ
 めく緋如此々々のひ瞞る容貌言語一点違ひ誰り非ると疑ふは衆
 皆歎び勳すも扶掖し宿所は還れば妻子も感あて死するのけれ甦生する
 心地ハ天と歎び地は喜ぶ欺待態を浅くし抑件の野猫が某小化た
 じ緋のころを甚麻といふ某が後妻より窓井のまのとれ廿二歳鄙い儔
 る死まて容止美りければ犯えその所竹るけり憐れ後妻窓井は変化

不測の妖獸を良人とどひて夜毎々々枕の敷も累りく牙二郎と名つける。
 男子を産ふれども非類の膚を穢され。精液漸々衰へく二十は足とぞ。
 まりのり是よりと後假一角の妾買易く只淫樂を旨とつる小の妾
 らわい程も或の精氣を吸耗されて下と昏も歴せ死するも或の寵の衰
 へく。竊小啖殺されを逐電走けんといひる。中より近届来つは船虫といひ
 妾の邪智逞しく慾ふく行ひ穢まり淫婦され彼同病の相憐れ同氣を
 相結ぶ沿習少く妖邪の觸れても恙なく且妖獸のあふは慍ひて正妻ま
 りり。此の兒の為の継母といひる。これも亦恨むべし。即ちりつる兒角太郎の仙
 より孝友の志疎るるね。彼妖獸を親とあひ違へく其奈ども妖怪と已か
 子の牙二郎が生れり。より角太郎を憎むと不慈なる継父の類あはれ日
 毎の呵責小啼るる。竊は殺しとぞの穴を啖んと欲せしども角太郎を過

世ありく神明佛陀の護りせのよ。身亦具の瑞玉われは渠のふともまる
 とるる死の程は角太郎が母の兄る大村清を奪くその機を察しけん。
 養人とく宿所は呼取り。文学武藝飽まて教くその女見せと妻せり。
 これより角太郎の養父の家は成長り。大村氏を冒せり。過世の災因あり。
 りあり。名を礼儀とつけられ。渠礼讓を宗とせ。威儀を乱さぬ。名詮自性
 且瑞玉の字をとり。取る使つる兒を譽るふあり。親の優りたる者ありて
 且仁義は篤く忠信あり。又悌あり。礼節智恵も自然に具る。世の後傑あり
 と父とも妖邪の為の勞しと功を養父母の世と逝り。後彼船虫が奸計り。角
 太郎夫婦のものを赤岩村へ呼せり。夏四月の日子る。角太郎夫妻離
 衣の密夫の子を身とりぬ。といひ立て。彼と仗の中と裂れ。濡衣は其の妻のふ
 わる。七角太郎と追出され。養父の送財田園まて。推留されてまをる。法

師あるんと思ふより養家の里人小告り里人亦憐しく返壁といふ地方の
 編小る菴と締く角太郎と容措の且米を贈り然を遺す聊恩とせし
 郎が孝友の誠心は感とせしと角太郎或と讀経或の坐禪無
 言の行と旨とく世の交を絶れん心は仕せぬよりわくいま剃髪せし
 命も亦神明の擁護ふよりあつれども危殃の急黄縁く羅衣か露
 偽の別れ折願ふ和殿の児を助け怨讎言と撃りあつと頼む言
 逆木の露深く霜とる夜の山風は落るや秋の木葉より脆人の涙より
 現八ははくぐとつる胃且塞れて洪敷きまよりをどひ久らぬる春を解
 け小膝と礮と拍て原来御邊のけ細草をそめりそ名吹えたる赤山石

ぬせのりけるよ御高小彼里る茶店のわが賣弄間話不憶く御邊の
 武男子息の孝友竹す違はども豈あつれや一角と名告れるのよ真
 角の贖あり今宵胎内實の邊を某が射る隊下る彼妖怪の贖物赤岩
 一角あると神をまじと誰り知る人少く御邊の身後は靈のあは居ぬ
 ぐ赤山石の妻子のくも心離言のるもわの定る知りて妻をその子ゆ
 枕邊に立夢に見せと緯如此々と告げけと詰れ一角頭と持とてあつ
 初よりとらりよわぬも角太郎の孝子の妖怪も亦神通われ既と變せし
 より言語心答常住坐臥武藝と教る刀法を身と異る所果敢
 る夢と実とと親と疑と又窓井も如右を目前る良人と非
 とくいそ夢を持死然る人情と思慮と勲る度あつんぬ却妻子の
 疑ひと苦心のとる彼をいしく危うんとあひしけれ黙止つこれ某が十七年宛を

伸よりもろく死と朽る所以なり大約死しく其の時の時至るは怨は登
 宗とるその甚難なり今幸ひは和殿は遇ぬ和殿は見と過せり夫幽明の
 辨難明の物は由て頭れ幽人は由て陳り人物化る幽明分別さるべ
 和殿の理とくありて見の菴を敲くとも交をの厚く結びて且言さる
 告めひは倘桃々しく説示さるる見の一切信むと還く和殿を疑ふりり
 久しにたつたわろる竊る時の至るを俟てその面よそ如此々と告るは
 是緊要の事とてと諄々しく説諭せ現八巻く領受く教諭宴よその理
 あり目今脚邊の言世果は就く賢息の之をあり神明佛陀彼身を護り且
 瑞玉と所持せとてつる小養父の姓を冒せり大村とも名生口する亦是大吉
 一人むくこれと異姓の兄弟ある然るは脚邊は頼れども死力盡相資けて
 彼妖怪と亡らんや是某が願ひにゆりけるも證據ある痴人の夢を説くま

似くいと身許えとられやせんこの義のりあど期と推せば一角も亦領受て現その
 遠慮するその某年来秘藏せる正に證據兩種ありその一種は短刀
 あり。其當時某が彼野猫の玩のありを刺んとく差く臂を破る刃あり彼
 折ふ妖怪が取遺れりけるを深く隠し今其の願ふて見よこの刃をのり
 怨雙言の物隔を刺しぬ。然るにこの短刀を角太郎の認むとてるも疑
 りわらこの一種を證據とてこれハ是の獨體あり。説くとも解けぬ時
 角太郎が鮮血をりてこれハ沃る炭著く親子とると分明るるの餘の時
 依るにその善は與まは義士とてく愛顧を憑とるよとあふと叮嚀小説
 示る岩窟の奥のより取虫を體に豫く準備やまけん歎久の葉成二
 三枚重合しと包しと短刀と共に遞与む現八巻くは受とりてる海より
 なる短刀の鏝の色もる。蟲蝕するまは縮る柄糸は朽粉離て死々に

残る鮫の用後れる梅花は似り況てその鞋の斑は利るは古墳石棺中の
 残劍の異るは現八もなるふ就ては就ても懐舊の涙をのこ進まける
 程は星落て東の山陝をみれば一角外面うち仰ぎ陽人陰鬼道
 異るれ久くある相譚ひく縦非類は誣られて窮厄をの身は通ともみつ
 うる愛と血氣も早急短慮のまをひて今より後角太郎と逢は扶け助
 られ名を揚家と具一ゆさささ初對面より玉のるごひ出く異姓の兄
 弟もより三天明地は説示さ彼妖怪はまき知れ宿念合期あるかえん
 彼妖怪の神通あり十里の外のを知ら彼奴の既十七年貌を變下り里
 在れも時と山林の暮もさひけ八月は必西二度小夜深る比宿所を出
 乃に深山はま遊ごこり彼奴が和歌射れ今宵も遊山よりくるされ
 この山の麓を折々人のこるの彼畜生の所為るた素この山の神迹あり猛獸

毒蛇あるとく觸魅妖怪も棲るを彼畜生を悼うとさくよ來く
 遊ごのそ彼奴を退治するのるる登山の人は患く神迹とせは死時
 かう遊ごまされるも月も告く後々のあろゆま死ゆもわさめれどあ
 じよ天機漏れまを還く神の憎は遍らん今ハオを是まごえあふれも後
 日不辛くさひ合せん為のそ拙さまの口遊と餞別せんは受といは現入貌と
 飲めくささく高論明教よく丹田は受納て忘るる下願を識語と
 示ゆと乞れ一角うち微笑某武藝と上白とく文里雲は疎れども人死
 しく火とるるとたの世不在日は優とわく萬理は通せるとるしとひひく
 声朗は誦まるとさけ相遭講武相別誘仇越全露玉菊花
 謝秋再厄不釋更向觸體妖邪亡處申山心遊八
 犬具足八大未周窮達有命離合勿謀南總雖遠終

歸一流。吟さるる三遍中、現八記憶きければ、一角子謝一別を生じて。
 件の觸躰と短刀と共に行袱小包を、終背より被て端引結びく。
 出くゆが、一角の空門まぐ送り出く又、大飼生久、奥院まうち。
 上りて平岩の隙間より東のう下り、おれ路のと近く、胎内實買し出る。
 りの扱返壁は、より角太郎と訪んとる、箇様々、小赴たひひり、又迷ふ。
 中へ側柏とて、そをれ、胎内實買より山路二里の間、彼此は彼樹あり、側
 柏とそ枝のみ、西へ指さるれば、よく東西を辨む。実、不測の奇遇あり。
 又遭ふより、はるたれを、又もくも、見のうと、只願憑なる、といふ、現八慰めく。
 その美哉、心さる、真府人間同、く、別悲しけれ、おれ、赤岩、
 子息、觸躰と寄せん、と、識語と吟し、示され、小野小町、苦を敷ひ、おれ
 めくの歌、優りく、世に未曾有の美驗、の、生る日、小膽勇武、偏の億萬人、

捷れむ、死之、く、ま、ま、死、あ、い、や、ゆ、り、け、ん、武、夫、の、彼、妖、獸、の、あ、ら、横、花、を、あ、る、
 の、喜、惜、む、し、く、と、の、ひ、つ、後、方、を、と、れ、か、今、ま、で、あ、り、る、一、角、が、親、の、消、て、る、り、け、を、

第六十一回
 柴門と敵なき雛衣寛柱と許し
 故事と辨し、禮儀薄命と告ぐ

却説大飼現八、々々の曉、く、ふ、山と下り、胎内實買と、中より赤岩一角武遠、
 靈魂の教、ま、銀山の母、り、一里の水澤と、傳ひ、る、路、凡、四、五、里、を、り、の、
 崎、嶇、と、踏、躰、く、返、壁、と、扱、く、程、ま、の、日、己、の、比、及、大、村、角、太、郎、禮、儀、が、
 世、と、捨、つ、世、に、捨、れ、く、日、影、と、疎、露、の、身、の、縮、み、名、の、花、ゆ、る、草、の、庵、の、け、こ、
 ぞ、ま、束、ふ、け、り、柴、垣、の、あ、る、こ、より、あ、り、と、あ、り、と、心、當、小、裡、面、を、う、と、觸、れ、れ、横、材、の、
 柱、萱、の、檐、二、間、の、竹、縁、三、尺、の、持、佛、棚、これ、も、奥、の、え、い、ど、も、膝、を、容、ま、り、過、さ、る、
 べ、裏、の、火、さ、る、新、辟、は、蝸、牛、の、液、と、遺、し、搔、ゆ、掃、ぬ、庭、の、草、葉、は、強、の、声、幽、之、

彼此の枝る冬樹の菴の死時よりあるや流しける雑炊の昨夕の随不
乾の秋深げれども東籬の菊の門陝しく五株の柳ををむむの
たゆも哀れるふこの菴の主なるべ一年紀二十のうをツツのあまをんをん色白く
唇絳小眉秀く居長高く月額の迹真黒く延る髪は菓の長言結し
鬢を後る放るは彼白河の安珍中も似らん秋身は薄肌色の袴の衣
只一領被て皂の輪袈裟を掛る華洛を歩く嵯峨野は隠れ瀬只の時
頼が面影まゆりた折戸のうを正面すく端近う経机を推居るあまを新
昔果の圓坐を布設をよ結跏趺坐する項の菩提樹の最角数珠を
うら掛る合掌觀念の眼と閉て餘念を口不蒼松葉を細枝をうは銜る
是るえ維摩のゆるるべ一机のうは何の经文や五六句可あり細小なる鏝
一隻と相馬製とる青磁の香爐もあけり立升る香の煙の靡をむむむ

滅易死と人の命は思ひくく行ひ済ませあらんこの人の名犬村氏礼儀は
わぶとく誰かあるとむり領く現八を思ひくく敲く柴の戸のあまを
声をありあまを率余るおまをる吾侪の遠来の浪人ゆく犬飼現八信道
と呼ぶれは犬村ゆは要事をお用と叫門く幾遍とま口告れども裡
面を絶く忘せを閉る眼をうらむくあまをたゆむをりり登時現八
あまを世と憶逸は甘く人と交と絶れんともやまを音つは耳死人の
如くま今勤行の最中にて思案任せぬあまをる三ひ草廬を顧て志を致
されんこれ昭烈の方多く臥龍を起す急をいん心つた所為不てあまの勤
行の果る迄俟ぶ対面あまをんと尋思をまをる折戸のあまを立在て
心ともく時を殺せ亭午の日影近づたり浩如ま前面より年尚弱女房の
身のふも賤しぬがその容止の艶麗る壁言野花の目よ美く村酒の人を

醉まる類も優くいなり。真回の古奈もめくあけんと入らざるあ鄙ふく。
 鄙ふのあぬ離衣とまき名生らねど白かりもみ近づく先后心あく露玉を
 まき涙を隠し袖頭巾袖小包めとま五月のきまらぬ身なかくとも軽死草
 履小跌々かふ甲斐多た草の戸の虫の名小呼ぶ横笛が怨よ似ら抱き誰か
 羞て秋外視せぬ頭を低てる程まのふ門成る大飼が立盡まると知らざりけり。
 瑛八遠小これをそく。ま心小猜まきうの女房のあら似げきた容約の醜く
 ぬいづく愁と含める雨と帯る夕の花雲小銷る月小似たり且この腹はま
 きま右身下り既小たま四五箇月小なまらぬや。まは只是縁てま大村が離
 別の妻彼離衣と呼々ぬ飲あまらる要まのめ飽ぬ別れぬ目と竊
 ひく良人小逢ん為るまづれを鬱悒く思ひやせん。ま熱まのふ在りく中垣を
 まるんよりま樹蔭小退る障まらるるも惻隱の端まると遠く一反

かり南る枝と敏死女昔の井陰と小盾小鯨をたり。まあま七離衣の柴の
 扇ま立よりく只潜然とうち泣死まをなひくへけん幾遍と影く押拭小
 涙と袖小斂ぬま。真白小細死まを抗く敲くもあらるま竹の竹離色まま
 女郎花を移らぬのを吹久ま浮世の秋のあた風の強顔人の心飲と怨言は呼
 かけく喃く所天角太ぬ。あわけとあまらる返らぬ形ま逢は濟ぬ胸の
 火の唇ま滅ぬ抱思ひ辭敵も媒妹の宿まのそ何日まを。鬱死くく死ん
 より切くあ身の捨言葉受て覚期を究めんと。ゆる比よりあまも無言の行は
 假托く心まま戸も開む心つらな程をあめ。け六那方まひま。ま
 も聴れぬ。それをこの世の辞別大村川の涸るとも生く宿所へ還ら。ま
 偽らう。ま困る。ま是は喃と刃の瘦るる。脚の癱る可敲けども口説ま
 心せぬ良人の言も不言の行まを凝る。ま莫妄想形死灰小異れ。ま



大村角太郎

大村角太郎



返壁の柴の戸も現八の雑衣か怨言と穢則と

現八

大村角太郎

大村角太郎

膚撓まき目も瞋ぐ庭の小草小集る虫の声の嚙々と春けり雛衣
 死心小堪されば苦一死声をゆりまき喃も所天目小足む物を宜りども是れより
 其処へ遠くねが声嗚もまきよりのはをぬるものもわら今ゆる愚痴はゆり
 ども二人が中へ高安の井筒よりる縁へ深死ゆりよけ髪初より親の結び
 妹仗川大和紀園りれわれと外は花見む月見の船の浮る恋はあられ
 日暮て誘ふ阿曾沼の生執隠れの紫鴛鴦也及ぐとゆふ年を経て夏の日
 子より小腹の病痾可ぬ薬も加持神符を身の仇とぬるまきまきとひひけ
 誣言小この春父まき公の世を逝りゆひ忌の中へ山雞の峯上隔て使
 臥房を俱ませぬゆに有身ぬる密夫の胤まきと継ぐの母御濡衣着
 られてもあはれぬと醫師まき決めるに寛枉神のこの身に黄縁一期の浮
 沈宿の仇浪風騒ぐとも神を托言ひ小膽む不清たあらと君をあらぬ人左も

又右も又跡も證據もまたゆと情由も糾さぐ休書を理る取と親
 品小預けて後安白は獨りまき本意欲否ゆりでもあはれとまきあらあ身とつら
 けら後父母兄弟養子妻せといふよと今ゆる忘れぬひ秋實のまき公継
 母御前の無理と並べ仰でもゆりまきまきれぬもわれ外伯父師恩重死
 養父の家を滅くとも何とも思ひぬるまき切くゆり二親達のけ頃まきまき
 まき又せんまきあはれは欺詭々赤岩呼取れより程もまき去られて帰居着
 里のあまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき
 言生けて尼小ゆりまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき
 麻糸の有無の答も中垣小隔る心折戸固に鎖誰か為親の仰は樹も
 るくあはれ出せし妻まきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき
 関もるは遠山里の草の戸小秋の螢と牙をまきまきまきまきまきまきまき
 対面せとて

のりべとそ外（よそ）の咎（とが）のりうんよ言（こと）の垂（た）糸（いと）絶（た）てらちるの譯（わけ）も知（し）らざ慰（なぐさ）もせ壁（かべ）生（な）
 草（くさ）の何（なに）日（ひ）まきも真（ま）夏（なつ）小（こ）堪（た）ま死（し）ねうとわぬるの竹（たけ）菴（あん）居（い）の舊（ふる）来（き）の氣（き）質（しつ）は似（に）け
 もる男子（おとこ）らうわむばう二（ふた）世（よ）をわけるあふまらう疑（うたが）れる小（こ）腹（はら）の内（うち）をさもえり
 れもせぬ苦（くる）しさる宵（よ）月（つき）は敷（敷）ある胡（こ）の酒（しゅ）は生（な）れぬ身（み）とく申（ま）斐（ひ）まければくまのいせもまえ
 る不便（ふびん）とせひぬらむあわけてえ開（あ）く心（こゝろ）つとと敲（たた）をら推（お）入（い）とまくなれ懸（か）
 鎖（かぎ）は女子（おんな）のちうら届（と）く引（ひ）放（な）されぬ情（なさけ）縁（えん）のいとも切（き）る恨（うらみ）この心（こゝろ）は骨（ほね）は疼（いた）む
 壓（お）むを倒（た）れのせり樹（い）牆（かべ）小（こ）推（お）著（し）るよと泣（な）く声（こゝろ）細（こ）まて哀（あ）果（は）て地（ち）上（う）は破（や）
 と伏（ふ）沈（しん）む深（ふか）死（し）敷（敷）たの露（つゆ）の海（うみ）は乾（かわ）ぬ袖（そで）の芭（か）蕉（せ）の葉（は）木（ぎ）の露（つゆ）ともをえさぬわられ
 且（かつ）しと雖（い）衣（い）の涙（なみだ）を飲（の）め身（み）を起（た）しと裳（も）引（ひ）合（あ）し引（ひ）揚（あ）げ柳（やなぎ）の腰（こし）は柳（やなぎ）茶（ち）代（しろ）割（わり）
 帶（おび）杖（ぼう）と締（ひ）直（な）しとも空（そら）小（こ）婦（め）は花（はな）もる菴（あん）とる清（きよ）もえさそ喃（な）角（かく）太（た）主（しゅ）々（々）
 こものめてもこの世（よ）はは添（そ）れぬ前（ま）世（よ）で造（つく）り罪（つみ）の報（むか）ひ来（き）てあぬ別（わか）れぬ身（み）を

殺（ころ）む因果（いんぐわ）とせひ諦（あきら）めぬ恨（うら）み絶（た）くあむぞうむらうより腹（はら）黒（くろ）く伎（ぎ）
 倆（りょう）人の証（あかし）言（こと）小（こ）罪（つみ）するぬ罪（つみ）をぬひ賢（けん）人も言（こと）られ終（つひ）り雲（う）存（ぞん）る雨（あ）後の月（つき）
 光（ひかり）の世（よ）々（々）は頭（あたま）れてあまそりける時（とき）は優（ま）ま倒（た）を引（ひ）くはゆる秘（ひ）ど人の心（こゝろ）小（こ）誠（まこと）の
 く命（いのち）を捨（す）る者（もの）をゆる死（し）の後の後（のち）うらうら胸（むね）を裂（さ）れぬ世（よ）もまぬかひの疑（うたが）
 ひの鮮（あざ）むをわらんその折（を）まて又（また）舊（ふる）の妻（つま）とせり朝（あ）夕（ゆふ）小（こ）只（ただ）一（いち）遍（へん）の唱（な）名（な）もあ
 刃（や）の田（で）向（むか）と受（う）ゆる道（みち）徳（とく）智（ち）識（し）の十（じゅう）念（ねん）の萬（まん）卷（くわん）千（せん）寫（しや）の讀（どく）経（きやう）も優（ま）
 成（な）佛（ぶつ）志（し）をん今（いま）より久（ひさ）し死（し）のるらあ刃（や）の齡（い）百（ひゃく）歳（さい）の後（のち）を特（とく）とせ其（その）室（むろ）を運（う）
 華（は）と致（ち）重（じゆう）く俟（まち）人のとあふとたりの告（つ）別（べつ）声（こゝろ）を涙（なみだ）小（こ）結（むす）隠（かく）る天（あ）秋（あき）の雨（あ）催（もよほ）ひ
 捨（す）られぬ世（よ）をゆり捨（す）て死（し）天（てん）の旅（りょ）路（ろ）へいそくとせひ訣（げ）めをわりのゆうそや妻（つま）の
 後（のち）影（かげ）の菴（あん）の中（なか）よりえんことも声（こゝろ）の定（さ）ま挾（さ）牡（う）鹿（ろ）の黄（わう）野（や）もかや角（かく）太（た）郎（らう）妻（つま）
 子（こ）珍（ちん）宝（ぼう）及（およ）王（わう）位（い）臨（りん）命（めい）終（つひ）時（とき）不（ふ）隨（ずい）者（しや）と悟（ご）果（くわ）ても活（い）る身（み）の人（ひと）木（き）石（せき）はわらわれば

方寸の海小浪立く心耳は風ハ吹ひども合當の春揺動を口は銜し松の
 葉も颯々として靡く如く断腸の氣色顔れを忽地どひへけん寂實と
 とく音もせむる舟も行ひ清けりる程に現ハる女音の樹蔭より今離衣が
 角太郎は怨くひける顛末を送る竊言をければ悲愁嗟嘆は堪げれ
 どもこれを扱め名を豫ても知れを良人おまらまざ遭つて慰むべくもわづれを
 傍痛くもとの又せんともたわらう既めて離衣を死と訣める氣色と言葉に
 且敬篤は且憐を背より竊小跟てもた。倘淵川へ身を投るるもわづれ禁を
 比の樹蔭を立去り遺過る足早まり著人となる程に遠は遠き
 鐘の亭午まらぬと角太郎稍解行の眼を望み松葉を捨経机を
 擡遣り、衝と身を起て外面に現ハるる離衣を追入と心せり幾歩
 杖もまくる後影を遥けりて声高き小犬飼生等も菴主只今解

ゆせり誘あきくと呼留るに現ハ佐と見えり今何と不口もい難し心を
 先後小躊躇る引えまとの間は角太郎の路次金剛穿て折戸口懸鎖外
 へ出迎は現ハる引え随は且竹縁の序とあり行袂を解卸し草鞋も踏
 及も脱捨る隣歩る角太郎の客座に請う茶を差ぬ顔と斂め慙
 慙小嚮向はとひけもる来訪のよを知るといども戒行の最中を迎接小違
 るる失敬を許し某則當國の人氏物の敷ゆゆいども大村角太郎禮儀
 と呼ぶもの既小貴客の高姓の屋名を生れをりて表知せり扱も何ホの所要
 ありく遠く貴臨せられやん某命運拙れ頻り小遁世の情願も思愛の
 絆を脱離し推俗の交遊を絶ゆゆいども親を更ふれどもあつて昆邪氏の
 城まへく維麻の室に坐せんと欲す貴客必高論あり明教より迷ひを
 曉すの幸ひ甚しむ人且寛き相譚のといふ又現ハる神を合せも膝向く

某の凡骨俗腸上總に生れて下總に成長り近曾京師に旅宿をたれど
まきく武藝を克と一丁の字義も知らば只異姓の兄弟五六人あり渠亦ハ
文学に長るあり武藝勇力の捷れるあり皆某が及ぶ所あり其の因果
同感の過世の如く棄れしを素より送る厚地と骨肉の優工と苦樂を
共さんと誓ひるふる不測の厄難あり相別りより往方と其只願索
巡るふもあつた三年を歴りて今茲に京師を去り陸奥を志し稍當國
を志す程にその細芋の茶店を貴所の孝友文学武藝并に養實兩大人の
學術武勇の支の趣に傳へて景甚本堪むる閑居の處を敲りて教を受ん
と出ひり勤行中とも知むる早や頻りに呼門をたむを礼にとせられ
疎忽に海客せられて呼申れ一期の幸以望言止り互に心答言訖ま
角太郎ハ且歡び且羞て頭を拊某過庭の訓を稟て和漢の學を好むも

不肯あり成るともされ今釋教に流れて道人と爲り己を志すもの
所仍の胎と重なり男子と生れ武するは阿容々と法師あり可るん車
この義を推し其が薄命を察し初見參多められも前路に急をあらわ
先や胸臆を重なり夫千金を得易く断金の友の甚得難しされど蓋を
傾けて故が如く白頭までも猶新なりといふ孔子華子子の交を例に援く
るねどもその志同一と學が所の異なり初見參多も故人の如く合璧比隣
年を歴るもその志異なりその方の同士の相を戴くも初見參多も等
のべり何れも何れも容を傲し不似れども某既ハ貴客とて益友と志す
昨夜の夢亦何処とありいと大なる大のその色黒白雜毛るがその數まて七頭
あり中ハ隠れしをえぬもわりの或の間遠く致し其も又り其深く
ある愛と學を鳴りしと呼ぶ程は一雉又の巨大まを其これを擁抱く

身みも亦また忽たち地ぢは犬いぬのるるぬと出いでひつ。愕おどろ然おどろとく覺ありて彼かの荘むら周しゅうの蠅はが蝶てつの夢ゆめに
似にく非ひざるものれが占あやまる事もせざり。今いま又また夢ゆめに虚あや夢ゆめする。貴き客かくの犬いぬ飼か氏しは
多く其その亦また養やしやう家かと嗣ついでて犬いぬ村むら氏しを旨こゝろし。且かつ貴き客かくの言ことばを言ことばく異い姓せいの兄あに弟てい
五ご六りく人にんのりともいれぬ。因よ縁ゆゑわぬ似にて願ねがひ件けんの人ひと々の姓せい名な我われ知しらま
ほ。厭いとしむるもさそを愛あいといふは現いま八はち感かんとて己おのれむその實まことは一大いち奇き夢ゆめなり某たがが義ぎ
兄弟あにてい亦また大だい塚づか信のぶ乃すなはち成な孝かう犬いぬ川がわ莊むら助すけ義ぎ任にん犬いぬ山やま道みち篤あつ忠ちゆう與よ犬いぬ田でん小せう文ぶん吾われ悽せう順じゆん
大江おほ親おや兵へい衛ゑい仁にん某たがと共とも六む名なの餘あまる者もの二人ふたにんあふ。いふに遇あふとをいふものと
生なまる不ふ敬けい馬ば角かく太た郎らう頻ひん頻ひん頻ひん不ふ膝かひの進しんむを賞あやむ原はら東とう皆みな是こゝろ犬いぬを以もつて氏しとせら
ゆ不思ふし議ぎさよあふまをく。夢ゆめの夢ゆめなるゆ。感かん悟ごせり。ゆゑを以もつて犬いぬ士しの義ぎ
兄弟あにていとありぬ。因よ縁ゆゑの亦またゆゑと問とひ現いま八はち合あ笑わらく。義ぎと告つぐ不ふ難なんくも
わら秘ひべ外ほかは憚おそりゆ。ゆゑは只ただ今いまの時とき尚なほ早はやなり。主人しゆじんの感かん得とくの瑞ずい王おうとわぬ。

おの玉たまのあつら。礼れいの字じの頭あたまと定さだまる。れはと向むかへされく又また敬けい馬ばく
角かく太た郎らうの眼めを睜あやむ。をいふゆゑ知しられぬ。其その實まことは瑞ずい王おうと年とし来きた秘ひ藏ざう志
とりが。このひつ亦また嘆なげ息いきと件けんの玉たまのふ就つて又また一ひと奇き談だんなるゆ。其その實まことは
母ははの諱なごと正まさ香かうと呼よぶ。性せう伶れい俐れい中ちゆう且かつ神かみ佛ぶつを信しんむ。大だい々の婦ふ女によ
子こは過とほり。ゆゑに其そのを立た座ざする比ひ加か賀が多た白はく山さん權けん現げんの社しゃ頭あたまの粒つぶ石いしを食くらふ。
その兒この護ご身み囊ふくろ小せう納な置ちと名なの痘う瘡そうも麻あ疹しんも究きうめ之これ輕かろし。とある人ひとは
時ときて北きた國くにへゆく商あや旅たび小せう云くもと憑よりて件けんの粒つぶ石いしを取とりて。其その人ひとのし来きた
つとめられ石いしの巾ぬすりてこれ玉たまと名なはる。項かたのけし。珠たま數かずを捨すて大だい約やく此
大小おほせうの禮れいの字じに頭あたまと名なはる。とある人ひとは。初はつて敬けい馬ばくをいふ。ゆゑに其その母はは殊じゆ
多たく尊そん信しんと名なはる。ゆゑに其その護ご身み囊ふくろに納なめり。とある人ひとは。其その二ふた才さいの時とき脾ひ疝ぜん小
まに危あやなり。不ふ誠まこと火ひ癌がん餌えも驗あやむ。療あや類るいを術じゆつ竭つたる折やりて母はは竊せう心しんを

師とて。件(くだん)の玉(たま)を水(みづ)に浸(ひ)し。その水(みづ)を飲(の)せ。小(こ)慈(じ)母(ぼ)の深(あ)信(しん)より。瑞(すい)玉(ぎよ)の奇(き)特(とく)やある。頭(かぶ)をえん。一(ひと)かみ。て食(た)まひ。二(ふた)び。て肉(にく)を増(ま)し。三(さん)び。て本(ほん)腹(はら)せり。その一(ひと)條(じょう)の某(たが)が。稍(せう)東(とう)西(せい)と知(し)り。養(やう)父(ふ)母(ぼ)の云(い)ふと。説(せ)し。傳(でん)聞(もん)する。それより。後(のち)某(たが)が。身(み)を恙(あや)む。且(ま)茶(ちや)を。用(もち)ひ。て件(くだん)の玉(たま)の奇(き)驗(けん)を。特(とく)に。即(すなは)ち。功(こう)あり。と。いふ。と。ま。り。れ。近(ちか)屬(じやく)養(やう)父(ふ)母(ぼ)の病(びやう)中(ちゆう)の玉(たま)を。浸(ひ)せ。靈(れい)水(すい)を。煮(な)く。勸(すす)め。て。一(ひと)に。其(その)が。病(びやう)病(びやう)に。奇(き)驗(けん)即(すなは)ち。功(こう)あり。と。いふ。又(また)命(いのち)數(かず)不(ふ)限(げん)り。ある。や。さ。る。奇(き)特(とく)の。病(びやう)苦(く)の。早(はや)に。退(たい)り。入(い)る。今(いま)茲(ここ)夏(なつ)の。初(はつ)より。某(たが)の。妻(つま)と。共(とも)に。赤(あか)岩(いわ)を。親(おや)異(い)母(ぼ)弟(てい)と。同(どう)居(き)し。在(あ)る。日(ひ)吾(われ)妻(つま)離(り)衣(い)の。腹(はら)痛(いた)猛(ま)小(せう)苦(く)く。百(ひゃく)藥(やく)驗(けん)し。ゆ。ふ。れ。其(その)某(たが)と。浸(ひ)す。彼(かの)王(わう)と。浸(ひ)す。水(みづ)を。飲(の)む。せんと。たる。折(せ)れ。母(ぼ)が。先(ま)の。玉(たま)を。と。え。と。離(り)衣(い)を。と。る。茶(ちや)碗(わん)を。搥(た)取(と)り。と。せ。一(ひと)程(ほど)は。離(り)衣(い)慌(わ)忙(ぼう)を。行(な)す。水(みづ)を。共(とも)に。件(くだん)の玉(たま)を。飲(の)み。何(なに)と。せ。と。わ。り。後(のち)悔(くわ)し。る。離(り)衣(い)より。危(あや)し。某(たが)が。周(しゅう)章(ぢやう)選(せん)恨(げん)の。壁(かべ)も。不(ふ)物(ぶつ)も。死(し)を。然(しか)と。吐(つ)き。く。の。あ。は。れ。清(きよ)み。し。赴(しゆ)度(た)毎(まい)心(こころ)つ。け。と。誨(し)ふ。腹(はら)痛(いた)い。も。瘡(かさ)も。その。日(ひ)は。次(つぎ)の。日(ひ)も。亦(また)次(つぎ)の。日(ひ)も。尿(う)尿(せう)と。共(とも)に。玉(たま)を。と。る。の。ま。け。れ。と。ひ。捨(す)て。ゆ。び。回(ま)わ。り。五(ご)月(げつ)の。比(ひ)より。一(ひと)離(り)衣(い)の。經(けい)水(すい)を。腹(はら)の。漸(ぜん)々(ぜんぜん)と。ゆ。ぐ。と。有(あ)り。身(み)の。似(に)似(に)。これ。より。醫(い)師(し)を。と。り。その。病(びやう)症(ぢやう)を。と。り。問(と)り。す。口(くち)の。脈(みやく)平(へい)増(ま)す。指(さし)頭(かぶ)の。動(どう)脈(みやく)頭(かぶ)れ。ま。ま。全(ぜん)く。懷(くわい)胎(たい)ある。と。い。ふ。と。ふ。恥(ち)死(し)を。と。り。其(その)二(ふた)年(ねん)以(も)来(らい)養(やう)父(ふ)母(ぼ)の。病(びやう)中(ちゆう)より。妻(つま)と。枕(まくら)を。並(なら)べ。一(ひと)況(きやう)く。の。春(はる)の。末(すえ)より。養(やう)父(ふ)母(ぼ)の。忌(い)中(ちゆう)に。い。ふ。と。夫(お)婦(ふ)臥(ふ)房(ぼう)を。俱(とも)に。死(し)す。今(いま)離(り)衣(い)を。懷(くわい)胎(たい)の。う。ち。の。ゆ。ぐ。と。い。ふ。一(ひと)言(こと)葉(は)を。枝(えだ)の。ま。ま。密(ひそ)か。夫(お)婦(ふ)の。乳(ち)を。向(むか)ひ。て。不(ふ)便(べん)の。ゆ。え。と。離(り)衣(い)を。離(り)別(べつ)と。媒(ま)妁(だく)を。許(もと)め。直(ただ)ち。其(その)背(せ)に。養(やう)父(ふ)母(ぼ)を。離(り)衣(い)の。廻(まわ)り。養(やう)父(ふ)母(ぼ)の。女(め)兒(じ)を。且(ま)赤(あか)岩(いわ)へ。同(どう)居(き)の。折(せ)れ。犬(いぬ)村(むら)身(み)宅(たく)へ。住(す)む。住(す)む。奴(やつ)婢(ひ)の。暇(ひま)を。取(と)り。裕(よ)と。い。ふ。恰(ただ)と。い。ふ。と。や

八犬傳六卷五下
世(よ) 一(ひと) 扇(せん) 辰(しん) 堂(だう) 藏(ざう)

些の行心ありとも去るべし妻ふわらむ素よりその性貞順を外心のまゝの某これを
 知るといども離別と成せん舊の居宅に住せん為明々地まひく死情由さ
 わるよとて人かき某命薄く仙死より一く愛と父失ひつ年歴を親呼々
 され七の勢ひの空より亦復同居と許されどこの身の路頭を呻吟ふとも大村
 るる田園の雛衣が生涯を送らん料はまゝをそれを親の返さる義理の
 妻と世を逝す養父へ以解く辨ゆゆせんと世を捨て法師まゝに吾
 妹子が怨も散れん親の思ひえさるゆゑのゆせんと果敢るも神は佛願
 言とつけ盡し言毎の戒行初対面より懺悔話説の恥を知らぬのれを似れ
 ど郷向雛衣が衣のひつことと貴客へせぬひけん命ふ又今ゆる徳ゆんと
 ともその甲斐る他人よらぬとも告る則良友とゆる歡びのありまを
 鳥許にとりられ義教と他事もある耳に示す心の誠を現はすとすく毎々憂

苦さ々と慰めりて感嘆の外ありとさうなると頭を擡て涙は流増せ
 貴所の孝友天感空しくらりせの夫婦の再會期しく俟べ然る早
 やく只言は法師まゝんと思ひぬ亦是千慮の一失るべし実推量
 せらる如く鶴小賢室雛衣とのいれぬの洩ゆり且その氣色をさ
 通るく漏さよりさふ死と樂む婦人の情之萬一のりわると後悔との
 甲斐るる後とと思ひければ後と跟て居るを二歩走り去ると
 折忽地主人が呼笛されてその義と果をさるりふらふ命も婦人よ不
 義なる死を知りてその死を極んと思ふ心のつるやりの主人に似げた所行るま
 りと詰れば元尔と微笑てその疑ひの理りされども雛雛衣が底意を
 知る死んと欲するとも瑞玉今身腹小在る水入るとも溺るる火火
 入るとも焼るる憶ふは渠が腹の病病に彼瑞玉の所以あり懐胎中

わづらへ。然るを死せんとはいま怖れて恍惚とて對面せし妻の信のりとも。
 親の爲の後たる不孝の罪を脱れんと。とどひまければ禁ざりた。といふ現八
 有理と曉りて又いふもさうりけり。且く角太郎の窓の目影をみ入りて今
 ちや未小近の要る死多辯の時を殺しく。衣抱はうさるる。あやとく
 今朝の炊もせむ。嚮は犬村の里人を贈来し。園子あり。僅は飢を凌ぐべし。
 いさぐ。といひひて。棚より卸と食の菘の蓋搔取ら。箸を添く。ちや現八
 羞る。地坑は鹿角の折焼て山茶を煮火の共侶は箸をいれくらち食ふ。
 現隔る客の中。清死のうの水源下流魚と水とを異る。ぬ款待態を頼
 した園子も既を盡る。沸立山茶を角太郎の茶碗ゆら。汲とていさ
 とく齊一飲む程。又現八は對ひていさ。ゆるた友は訪れくら。同好の義を
 述もせいで。真愛の自家的話と。さる鬱悒はれけり。大飼ゆの何人。師と

まぐ武藝と學びひり。生れ得くとの師は勝る豪傑もせよ。死はあわねむ。
 その儔もたをさる。とゆられて現八は。何々とうち笑ひて。不某が師の二階松
 山城及びりけれども。刃の不器用さをも。大刀ぬくまを覺の。武の二藝とくら
 かの如く。況て文武を極と。いさ。難死所行る。よ。恥る。死言多。其を
 穉死時。太平記と天く好と。熟讀して。ゆども。月解。死を言り。その中。不
 三入張の弓。十三束三伏。筑の死の上。ま。引。斬。堅。ゆ。丁と。放。る。と。い。ふ。と。
 卷の七の三丁。他の。処。も。処。も。を。を。この三入張と。い。ふ。と。師。も。問。ひ。又。近。曾。京
 師。は。旅。宿。せ。折。は。古。実。者。小。問。ひ。り。と。の。答。定。ま。る。命。ま。の。人。の。説。は。三。世。お
 三入張の弓。といひ。強弓の。ひ。あ。わ。む。弓。の。總。て。三。入。を。張。り。の。足。強。り。一。人。張。り。
 一人。あ。ま。り。一。人。の。貴。人。の。弓。を。一。人。を。張。る。大。死。無。礼。を。い。ひ。り。
 武家故事。要言と。い。ふ。書。不。記。と。い。ふ。を。
 同。この説も。亦。あ。る。ゆ。く。弓。の。必。三。人。を。張。る。も。る。六。三。入。張。と。い。ふ。と。い。ふ。と。の。あ。る。と。

況て五人張といふ弓もあつたや。且軍記は誌す所の強弓の武者にありて貴人の弓と
 のまよひのまよひ主人の二代の學者ありて且武藝も長あつた。これらのまよひ考わん件の
 説のまよひと向ふと角太郎らばて二階松先生の武藝のまよひ父もまよひ知とまよひ
 嘆賞せしるのまよひ彼先生も考の定まらぬと某まよひ考ゆるまよひねた彼二
 人おまよひ張といふ臆説の貴評の如く論まよひ足らぬの欲按するまよひ軍記三人張
 五人張の弓といふまよひ猶唐山の二石の弓五石の弓といふまよひくまよひの力と量らん
 為まよひの真中まよひまよひつげこれを梁まよひ吊てまよひの本末まよひ米苞を搦てまよひ
 強弓まよひあつたれば重まよひまよひ勝まよひまよひの義と彼の書まよひ記せし書言故事まよひ
 不学類の條まよひあつたればと夢溪筆談まよひ辨證の篇まよひ載せし所と詳まよひと
 まよひの書まよひ沈存中まよひ云まよひと弩と挽蹶まよひ古人釣石まよひ以これを率まよひ今人の
 乃稂米一斛の重を以一石と凡石者九十二斤半と以法とまよひ乃漢秤三百四十一

斤也。今之武卒の弩と蹶は九石と及ぶ者あり其力を計るとは乃古之十五石
 あり。魏之武卒は比まよひの人多まよひ二人有餘まよひ當れまよひ又三石の弓を挽者有り乃
 古之三十四鈞あり。顔高之弓は比まよひの人多まよひ五人有餘まよひ當るとまよひ又按まよひ
 石の重百二十斤と國語の注はまよひをまよひこれ漢の秤の分量は後八一斛とめて一石
 とのまよひの漢の時より如此まよひ漢の百廿斤の宋の秤を二十斤と當り漢の一斛は
 宋の二斗七升あり。沈存中より又荀子より十二石の弓のまよひをまよひ又齊宣王
 好く二石の弓を射く。これを九石とまよひの實を二石のまよひ九石ありまよひのまよひ説死の
 産塞編并は續博物志のまよひも見えたり。これが唐山の弓は二石とまよひのまよひ邦
 人のまよひ三人張といふまよひのまよひ一斛のまよひの米の重とまよひ一人力とまよひ三人力とまよひ
 石のまよひこれまよひのまよひ三人張といふまよひの二石の米を搦る強弓まよひ疑ひまよひ又十
 三東二伏といふまよひのまよひの長大まよひのまよひ凡一東を五寸とまよひの今の通尺とまよひの

まきばその実の二寸へ所云十二束と六尺五寸の征前ありて実を三尺九寸する
べ又三伏の三節を伏の假字をその箭竹の節延く僅に三節のそりり
武器の長短を裁束といふは天朝の古実十束の御剣の長十握あるを
知るべ死の道世兵学者流の書あり取り足らざる臆説より由ぬるるぬ
るふそとち含笑々答れば現八さう感服して昔の人もめくそゆひけり君と
夜の物語より十年の学は勝る教諭より年来の疑念立地は氷解
せり序は学問せまはし又又剣の巻は源氏重代の大刀あると現吼る蛇の鳴
か如しよりその大刀の名を吼九とつけられその二人人知る刀剣中亦声の
しよく吼るとこれありやと問ふ角太郎又答て刀剣も亦吼ると西陽雜
俎の境異篇は鄭雲少時一劍を得り鱗鉄星鐔時有て吼る
常は在居は在り晴る日あは膝を藉くこれを玩ぶ忽地一人有と云云と見

え又後燕晋の太の元年元七年小雄劍の鳴る所見ありと説示せ現八
の盛衰記已下の軍書小大逆謀叛の徒と朝敵と誌しるその
義へ穂るやと以角太郎領をそよく心づるひぬ凡國家の臣民たる
のれ大逆の罪ありと是則四賊へ唐山の史傳ありこれらを賊と書しり
然る朝敵といふ可るん卒敵の字書は音秋俗字に敵敵の小兒の喜
びく笑の貌と注しり又彼國の俗語小敵手といふ此土あく相るといふを
ト甲乙と争ふの送よこれを敵といふ大逆の罪人を朝敵といふは朝廷の敵
といふは同ト記者の文盲笑ふ憶ふ清盛頼朝より尊氏將軍に至
るまで朝家を幾く自家を營と兵權を擅りて宇内を制しひひ
順逆の理は暗死め多唱初るあやゆらむ記者の當時は媚て作せ俗
稱るゆめといふ現八然びく某もささひひへ又戦陣は夜討まると進退の

笛と呼子と唱へ國の大事と報る使と早打とありの近死せよりの俗言なり。
 これと漢文に写さる何と書きて當んやと問ふは角太郎沈吟し呼子の笛に
 叫子と書べし又早拍の羽檄小まど急脚遞と書きてつけられ并小宋の沈存
 中が筆談十三の官政権智の西編とんぬりて答る小現八とまじく感
 しくあは一條嗚呼がぬれ回事のいり近死の浄瑠璃本及歌儂伎狂
 言は親子は認らむとて疑ひを決するその子の腕を劈れ親の血と合
 する小実の親子の鮮血滲せ親子をねばその血よふま或は親の死後小
 至りく白骨髑髏小血を瀝るもその験の多しは婦幼もよく知りてこそ
 けれどもこの本つ所定なり何ホの書より出るあや素より不經の俗説
 欽主人の考はまほしと問ふ角太郎ら味て義も亦管見の梁書五十の
 列傳豫章王綜が傳は綜が母呉淑媛の初齊の東昏の宮中は有り

時より梁の高祖は幸ひせられて七月中に綜を産め死せしと宮中にて
 疑ひのありけりその後淑媛の寵衰し高祖を怨み竊にその寸絲小
 告ぐ親の足東昏君の送腹するといひを綜は半信半疑して共高祖と
 怨むる潜ひく曲阿は赴て齊の明帝の陵を拜するが東昏の胤
 るを定り知りたるは當初の俗説は生者の血を以死者の骨を瀝は
 滲れが父子といふものあるをちやく綜は竊に東昏の墓を掘り骨を
 臂の血を以瀝りてこれを試し又一男を殺してその血を瀝りて試し
 ありしは是より常は異志を懐て後四年小一謀叛を五十五卷の初
 丁はをとり又唐書九十の孝友列傳する王少玄が傳は云王少玄は博州の
 聊城の人まりけりその父の隋の世の末に乱軍の中を殺されり少玄甫十歳の
 時父の所在を母に問ふ母云云と答る哀泣く彼此と其の尸を求る野中



白骨多くあり時よの人教くい母子の血を以骨を漬て滲るのれ父の齒肉を
 とり少く悦びく野中の白骨をみる毎に膚を鏡く血を瀝ぐと凡一旬
 のありしごとく遂に父の骨をぬく。母のまゝに母をけりてその創の甚しかり
 ぬ。下を餘ゆりく瘡けり時唐の太宗の貞觀年中州よりその状を言
 上せしむる徐王府の參軍といふ官人なるまじりて合本の四十一の十二丁の
 右のふえり。さればこの唐山の俗説は物ととりとも梁唐の時このあり且
 當時の史官麻止とてその經驗を書せしむる言はあらざるなり是亦
 秘藏の説るをあらはしむる惜れども貴客の為は譚するの事と回る母は
 古書を引く證文疑はくもあらはる現八類り小感嘆く。応仁以来京
 師はもと和漢の書籍亡失せし四書は全きをとりも稀なり。されば
 学問の地を拂き五山の僧徒るどの外は漢籍を讀むのなきは。主人の

今尚青年あり博學宏才の如しと憑く。いと怪談を述く。この
 角太郎の噂の貴客の賞美の分は過り。又言の徳の害なりと
 玉通のいひの世の博物は皆まじり。傍痛くと笑ま。他聞の用捨れ
 か。と互に讓。辞義口誼笑坪の會は餘念る。時稔るまで相譚。折
 外面はまじり。人居る女裝轎子一挺と又一挺の十字竹輿を折戸口
 扛卸せし先は建る轎子の戸を用せし物。の是則別人を赤岩一角
 武遠が賤配の妻船虫に捐落する衣の下は白小袖をうち龍裝。金
 襪の帯。四下は光輝た練の帽子の白妙。扇翳く。立あり。門せし。鷹
 揚。腮推向く。示せし。一箇の後者か。あらは。折戸を頻り。敲たけ。せ
 畢竟船虫あるまで。又甚麻る。話説あり。その第七輯は解分を。を。知。ん
 里見八代傳第六輯卷之五下終

船虫が
 この地は
 嶺南
 一角
 未歴の
 第七輯
 小至りて
 眞

○著作堂手稿南總里見八犬傳第六輯書畫刷人目次

書畫工

自卷之一至卷四
之半但簡端分筆
自卷四末至卷五
上下并簡端合筆

柳川重信

溪齋英泉

淨書

卷一二五之下
卷三四五并序文

谷金川
田中正造
朝倉伊八郎

刷刷

全卷繡像

家傳神女湯

一包百銅

熊膽黑丸子

一包代五分

精製奇應丸

大包代貳米 中包代一匁五下
小包代五下 下包代一匁五下

婦人死む此妙茶 一包代六匁 半匁三拾式 丸

○取次所
江戶芝神田町中坂下南側四方の向
江口神田明神下同朋町東横町
同家元飯田町中坂下南側四方の向
江口芝神田町中坂下南側四方の向
大坂心齋橋筋の向
瀧澤氏製
瀧澤氏製

大阪	河内屋善兵衛	東京	須原屋茂兵衛
同	伊川屋善兵衛	同	山城屋佐兵衛
同	敦賀屋九兵衛	同	小林新兵衛
同	秋田屋太右門	同	丸屋善七
同	河内屋茂兵衛	同	和泉屋市兵衛
同	河内屋和助	同	須原屋伊八
同	秋田屋市兵衛	同	出雲寺萬治郎
西京	出雲寺文次郎	同	梶屋喜兵衛
同	村上勘兵衛	同	近江屋半七
同	勝村治右衛門	同	長門屋龜七
同	杉本甚助	同	三家村佐平

名山閣

東京芝大神宮前書舗
和泉屋吉兵衛發售

